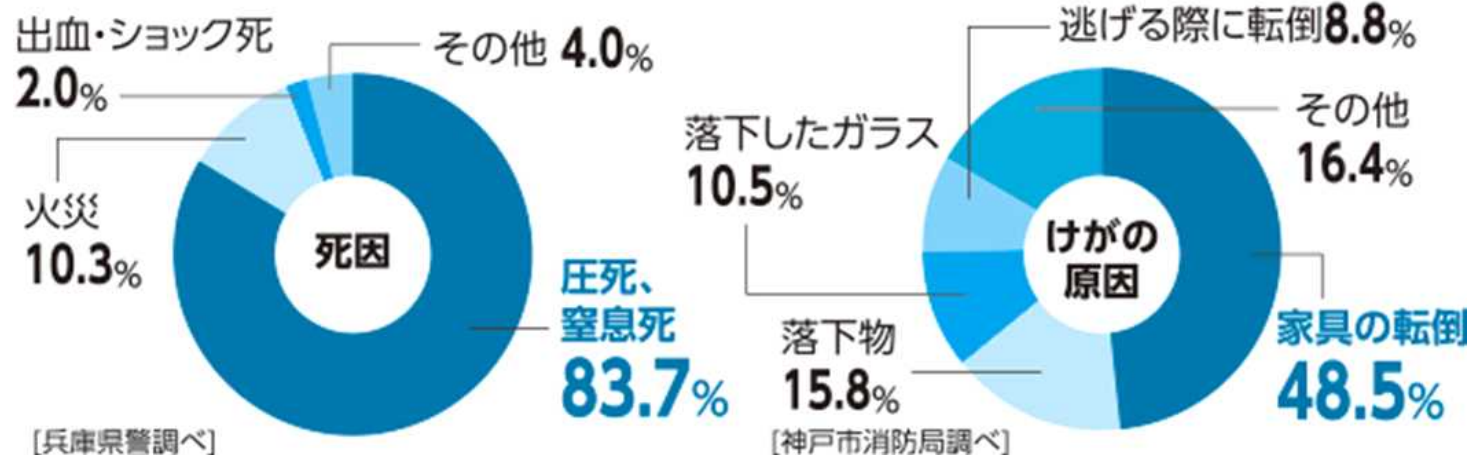


あなたの家は大丈夫？

阪神・淡路大震災における人的被害の原因



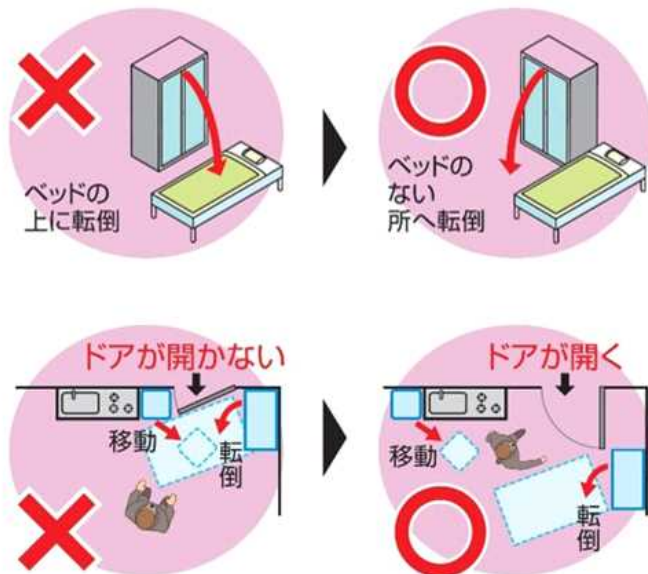
地震発生後の家の中



家具の転倒や落下等を防止する家庭内の対策をしていれば、多くの命が助かったかもしれません！

家具の「設置」と「固定」のポイント

家具の設置

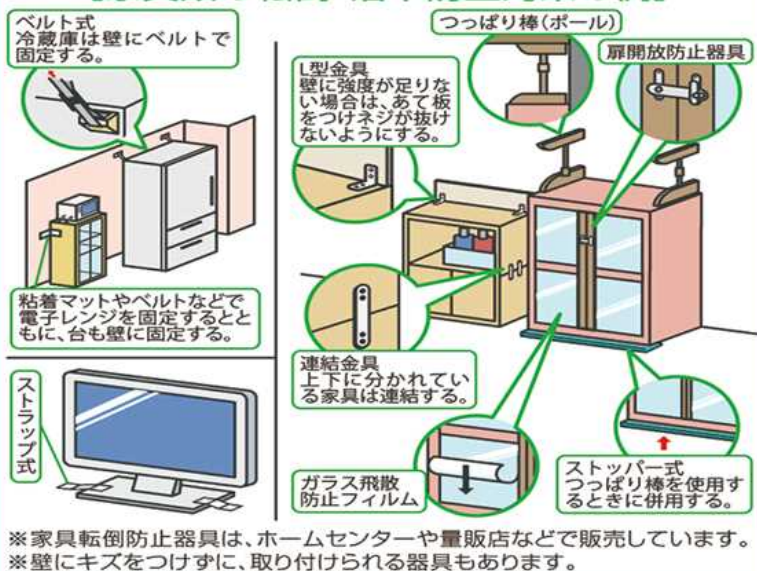


「寝る場所」、「出入り口付近」にはなるべく家具を置かないようにし、置く場合には、転倒や落下、移動により通路をふさがないレイアウトを工夫しましょう。（イラスト：東京消防庁）

家具の固定

家具等を固定することが重要です。使用している家具や住まいの構造に合わせて道具や方法を選び、固定するようにしてみてください。

【家具類の転倒・落下防止対策の例】



中部防災だより NO. 24 令和7年 夏号

ピックス

- ・備えの基本(自助の取組紹介)
- ・家具等の転倒・落下防止
- ・通電火災を防ぐには
- ・津波がくる前に逃げましょう



編集・発行
静岡県中部地域局
藤枝市瀬戸新屋 362-1
藤枝総合庁舎本館2階
TEL 054-644-9104
Mail chubu-kiki@pref.shizuoka.lg.jp

「備えること」に変わりはありません

2025年3月31日、近い将来、発生が懸念されている南海トラフ巨大地震の「新被害想定」が公表されました。

私たちのやるべきことは、これまでどおり、「備える」ことに変わりはありません。

特に「家具等の転倒・落下」、「通電火災」、「津波」の対策をすることで、被害想定にある死者数を減らすことができます。

対策すれば被害を減らせます！

参考：内閣府「南海トラフ巨大地震最大クラス地震における被害想定について【定量的な被害量】」

https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg_02/pdf/saidai_01.pdf

家具等の転倒・落下防止

家具等の転倒・落下防止対策が進めば想定される「家具等の転倒・落下による死者数」が

約66%減

火災に対する防災

地震時の電気火災の発生を抑制する「感震ブレーカー」の設置を促進することで、想定される「火災による死者数」が

約52%減

津波に対する防災

全員が発災後すぐに避難を開始すれば想定される「津波による死者数」が

約66~93%減

※ この数値は、あくまで一つの想定として作成したものを参考にしており、実際に南海トラフ巨大地震が発生した場合に被害様相どおりの事象が発生したり、被害の減少を保障するものではありません。

今回はこの3つの対策について紹介します！

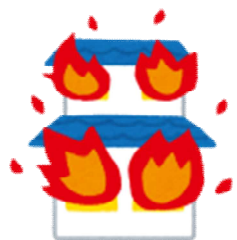
もう一度、「備え」に対する意識を高め、被害を最小限にできるよう、「対策」しましょう。



「通電火災」を防ごう！

前ページに掲載したグラフを見てのとおり、阪神・淡路大震災の死因第2位が「火災（10.3%）」です。

災害の後で停電が復旧すると、火災が発生することがあります。
こうした火災は「**通電火災**」と呼ばれ、阪神・淡路大震災では発生した火災の6割が通電火災によるものといわれています。

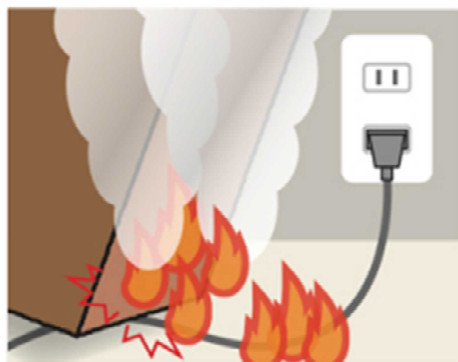


「通電火災」のメカニズム

災害により停電が発生し、その後電気が復旧した際、可燃物が落下した電気ストーブや転倒した家具などにより破損したコードなどに、再び電気が通ることが原因で火災が起きることを「通電火災」といいます。



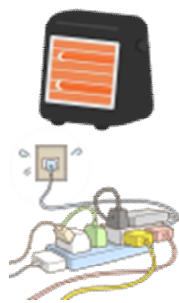
復電後、電気製品に落下した可燃物から発火



電源コードの被覆が破れて短絡(ショート)により発火

通電火災の原因になるもの(例)

- 白熱電球
- 電気ストーブ
- オープンレンジ
- 観賞魚用ヒーター
- たこ足配線



(左図：リフォーム産業新聞)

➡ 通電火災を防ぐためには

(情報提供 志太消防本部)



停電中

電気機器のスイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜く。

自宅を離れる際

留守中の発火を防ぐために、ブレーカーを落としてから外出(避難)する。

電気供給再開時

- ・電気機器や配線・コードが破損していないか
- ・燃えやすいものが近くにないか 等

十分に安全を確認してから電気機器を使用する。

外見上損傷がなくても、**壁内の配線の損傷**や、電気機器の**内部が損傷**している場合があります。

そうした場合でも通電火災が発生する恐れあるため、**煙の発生等の異常を発見した際は直ちにブレーカーを落とし、消防機関に連絡してください。**



地震時の通電火災対策には**感震ブレーカー**が効果的です (内閣府 HP の情報を編集)

「**感震ブレーカー**」は、地震の揺れを感知したときに、ブレーカーやコンセントなどの電気を自動的に止める器具です。不在時やブレーカーを切って避難する余裕がない場合に通電火災を防止する有効な手段です。

主な感震ブレーカーの種類



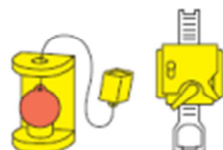
分電盤タイプ(内蔵型)



分電盤タイプ(後付型)



コンセントタイプ



簡易タイプ

※ 感震ブレーカーの設置費用の一部を補助している市町があります。条件や金額等は市町によって異なりますので、詳しくはお住まいの市町にお問い合わせください。

津波対策 まず逃げる！



まずは津波に関する情報について知ろう！！

津波警報・注意報の種類

地震が発生した時、地震の規模や位置をもとに、気象庁から津波警報・注意報が発表されます。

種類	発表基準	発表される津波の高さ	
		数値での発表(発表基準)	巨大地震の場合の表現
大津波警報	予想される津波の最大波の高さが高いところで3mを超える場合。	10m超 (10m<高さ)	巨大
		10m (5m<高さ≤10m)	
		5m (3m<高さ≤5m)	
津波警報	予想される津波の最大波の高さが高いところで1mを超え、3m以下の場合。	3m (1m<高さ≤3m)	高い
津波注意報	予想される津波の最大波の高さが高いところで0.2m以上、1m以下の場合であって、津波による災害のおそれがある場合。	1m (0.2m≤高さ≤1m)	(表記しない)



津波に関する情報はどこから得られるの？



※1 エリアメールにより該当する沿岸地域に一斉配信

※2 海水浴場等で波音や風で音が聞き取りにくい遊泳中の人などへ旗を振って視覚的に伝達



津波に関する情報が出たらどのような行動をとればいいのか？

できるだけ早く、近くの『津波避難施設』や「高台」に避難！



避難は徒歩が基本です。この機会に、自宅や職場からの避難場所、避難経路、避難にかかる時間等を、実際に歩いて確認しておきましょう。



高台に避難してください

海岸付近で地震の揺れを感じたとき

(長い時間ゆっくりとした揺れを感じたときも)
(大津波警報・津波警報が出たときも)



ただちに



高台や津波避難施設へ

津波の指定緊急避難場所に避難

※ 各市町で指定緊急避難場所(津波避難施設や高台)が設定されています。

避難にあたっては

● より早く、高い所へ避難する

● 徒歩により避難する

- ・自動車による避難は原則禁止
(→交通渋滞が発生し、避難が遅れる等のため)

普段から、すぐ避難できるように

★避難場所の確認をしておく

